

「福音信仰について——水と童安」
——宮崎安右衛門覚え書（その四）——

杉
瀬

祐

Summary

“On the Understanding of the Gospel of Jesus Christ— Yoshikawa Issui and Miyazaki Yasu-uemon” —Miyazaki Yasu-uemon Part 4—

Yu Sugise

In this report, following my former one, “Do Imitatione Christi and the Psalms”, I will trace Miyazaki Yasu-uemon’s spiritual development in relation to Yoshikawa Issui, who was a good friend and a spiritual elder brother to Dōan, and who had graduated from Kyoto Imperial University and was the head of the San Francisco Branch of Toyo Steamship Company, and a director at Shokei Christian Girl’s School in Sendai and afterwards was engaged in evangelical activities in Tokyo. Issui left spiritual diary, which he wrote in midnight, containing his prayers and meditations and so on. After his death, Dōan edited and published it under the titled “Hibi-no Kate, —Eien-no Onchō,” that is, “The Daily Bread — The Eternal Grace of God.” This book was one of Dōan’s beloved books and Doan wrote his own notes on its almost every page. Through his comments, Dōan conversed with Issui concerning existential understandings of the Gospel and of Zen Buddhism and so on, and also Dōan pursued a real and vivid presence of true salvation, while keeping Japanese mentality, and avoiding the Westernized Christianity as well as the Mukyokai-shugi.

Contents:

1. Preface — How often Dōan read the book.
2. Issui — His personality and struggle.
3. Issui and Dōan — their friendship and religious relationship.
4. Dōan’s spiritual locus.

一、序

この小論は、前稿の『イミターショ・クリスチと詩篇』（神戸女学院大学論集第三十四巻第三号、一九八八年三月）に続くもので、吉川一水著『日々の糧——永遠の恩寵』への童安の書込みを中心に、一水と童安の福音信仰の理解の問題を探ろうとするものである。

既に記したように、宮崎安右衛門（童安、道安、道天）四女秋山マリア氏の御好意により、童安の愛読書を拝借閲覧させて頂く機会を与えられた。ここに取上げる吉川一水『日々の糧』は一水の死後（昭和二十一年二月七日没）、友人であった童安がその日記を編輯出版（昭和二十六年六月二十日 第一刷、野口書店、定価二八〇円）したもので、厳密に言えば童安の愛読書とするのはおかしいかも知れないが、殆ど全頁に赤鉛筆や書込みがなされ、巻末には十四回繰返して愛読したことが記入されている。『イミターショ・クリスチ』の三十数回には劣るが、この書もまた童安の座右の書であり、信仰的対話の書であったのである。『詩篇』『新約聖書』『イミターショ・クリスチ』は童安にとって愛読書であると共に信仰を啓示する天来の書であったが、この一水の『日々の糧』は二十年来の信仰の先輩であり友人であった人の日記である。文の行間に一水の日常坐臥の言動や風貌が浮かび、また背後にある事件なども髣髴としたことであろう。童安はここでは遠慮なく同感や批判の書込みをして、前掲の諸書に対するのとは異なった姿勢を見せている。その内容は順次見てゆくであろう。

三十二年四月二十四日（水） 三読し終って感謝。

三十二年六月十二日（水） 四読し終って感謝。

〃 十月三十一日（木） 五読。仰臥最中。

三十三年二月八日（土） 六読。病後良なりて坐つてよむ。

私が無駄な否有害な註を翁の文に書入れしを衷心より恥づく。全文取消しとする。

（そのとおりだ。）（註・これはどこに接続するのか不明。インクの変色工合から見ても最後の三十七年九月二十六日、十四読に続くものかも知れない）

三十三年六月十六日（月） 七読。

三十四年三月二十日（金） 八読。

〃 八月二十六日（水） 九読。

三十五年二月二十六日（金） 十読。

〃 十月十日（月） 十一読。

三十六年七月三日（月） 十二読。

三十七年四月二十二日 十三読。

三十七年九月二十六日 十四読。

この巻末の書込みと、本文中の書込みに日時が記されている分を拾い出して比較してみる。

三十一年 9 / 23、10 / 5、

三十二年 1 / 20、3 / 27、4 / 23、5 / 16、5 / 26、5 / 28、6 /

4、10 / 19、10 / 21、

三十三年 1 / 16、1 / 20、1 / 25、1 / 30、3 / 14、3 / 23、9 /

27、

三十四年

1 / 12、3 / 4、5 / 17、5 / 21、6 / 1、8 / 20、8 / 22、9 / 6、

三十五年

1 / 21、1 / 30、2 / 5、2 / 7、2 / 9、2 / 11、2 / 15、2 / 18、2 / 23、2 / 26、3 / 4、3 / 7、5 / 13、5 / 20、5 / 27、6 / 1、2 / 2、6 / 8、6 / 9、6 / 17、9 / 1、9 / 5、9 / 7、9 / 14、9 / 28、10 / 1、10 / 2、10 / 6、10 / 19、10 / 27、11 / 12、11 / 29、12 / 1、12 / 7、12 / 10、12 / 24、

三十六年

1 / 25、2 / 2、2 / 6、2 / 7、2 / 11、2 / 17、2 / 24、3 / 1、3 / 3、3 / 6、3 / 9、3 / 10、3 / 13、3 / 15、16、3 / 19、5 / 7、5 / 15、5 / 16、5 / 20、6 / 22、6 / 29、8 / 15、9 / 9、

三十七年

1 / 2、1 / 6、1 / 8、1 / 11、1 / 12、1 / 16、1 / 29、1 / 31、2 / 2、2 / 8、2 / 27、3 / 4、3 / 7、3 / 12、3 / 17、3 / 19、3 / 24、3 / 26、3 / 28、4 / 4、4 / 7、4 / 15、4 / 17、4 / 21、22、7 / 21、7 / 24、7 / 28、7 / 30、31、8 / 2、4、8 / 6、8 / 10、8 / 18、8 / 25、26、9 / 21、22、10 / 6、10 / 13、

(註・童安は三十八年一月十六日没、満七十四才、二月二十二日

で七十五才になるところであった。)

書込みにすべて日時が記されているわけではなく、むしろ日時の記入されているものが例外である。童安は、自分の精神的・信仰的問題に

とって重大な意味をもつもの、魂に常に刻んでおくべき事柄と考えた箇所に、日時を記したように思われる。また、その読み方も単に通読するというような読み方ではなく、短い章句を熟読反芻して自ら得心し、自らの魂に刻みつけるという風であったように思われる(これは『聖書』や『イミターショ・クリスチ』などの魂の書についてであるが)。今、簡単に前記二種類の月日を眺めてみると、例えば、昭和三十三年は、一月中旬に読み、三月下旬から再度読み四月二十四日に読了、五月中旬に又読み始め六月十二日に読了、十月中旬から読み始めて月末に読了、と略々推察される。そうだとすると殆ど一年中折りにふれて絶え間なしにこの書を読んでいたことになる。三十三年には六月十六日七読とあるが、その他に一月中旬から下旬、三月中旬から下旬、九月も読んでいたことになる。三十四年は一月に読み、三月に読み、五月から六月にかけて読み、八月二十六日九読と記し、九月にもまた読んでいる。三十五年は一月中旬か下旬から読み始めて二月末に十読。三月にまた読み、五月中旬から六月中旬まで続き、八月末か九月初めから十月十日までで十一読。すぐ引続き十月十九日の記入があり、十一月、十二月と書込みがある。この年は切れ間なくこの本を開いていたように思える。三十六年も一月下旬から三月中旬まで日時の記入があり、五月、六月と続き、七月三日十二読。さらに八月十五日、九月九日の記入もある。三十七年は童安七十三才、死の前年であるが、正月早々から二月三月と続き四月二十二日十三読まで、さらに七月下旬から続いて九月二十六日十四読、そしてまた十月にも日時の書込み記入がある。童安がわざわざ第何回読了と記録を残しているわけだから、その他の日時は一部分の拾い読みにすぎ

ないかもしれないが、こうして残っている日時を拾ってゆくと、異常とも思える頻度で『日々の糧』を精読し、座右において親しんでいたことがわかるし、それは所謂愛読書と言うようなものではなく、晩年の童安にとっては文字通り信仰の「日々の糧」であり、兄事した一水との霊的な対話であったのだ、と言うことができるであろう。

尚、以下の論考中、吉川一水『日々の糧——永遠の恩寵』からの引用は『——』を以て示し、同書への童安の書込みは『——』を以て示すこととする。

二、吉川一水

『日々の糧』の奥付に、著者略歴として次のように記されている。

明治十四年九月二日生。

京大佛法科出身。東洋汽船株式会社桑港支店長。仙台市尚綱高等女学校の主事等を歴任・昭和二十一年二月七日昇天。

吉川起行、一水と号し、尚綱高等女学校の主事を勤めたのは大正七年から十三年まで（二十六才から四十二才くらいであろうか）。学校で聖書の科目を教え、学内礼拝で説教し、学外では「澱クリスチャン団」で説教し、尚綱の生徒や卒業生に大きな影響力をもっていたことは、『尚綱女学院七十年史』を通して拙論「転身・回心の岐路——宮崎安右衛門覚え書（その二）」（神戸女学院大学論集、第三一卷、第二号、一九八四年十二月）において既に記したところである。東洋汽船の桑港支店長をいつまで勤め、また何故辞めたのかは不明であるが、年令的に見て東洋汽船辞

職後直ちに尚綱女学校に就任したと思われるが、主事という職名が、学生主事とか宗教主事とか明確ではないし、教員としてののか、職員としてののかの身分序列も明確ではない。尚綱に残る諸資料を詳しく調べれば招聘その他の諸事情がはっきりすることであろうが、筆者の調査はまだそこまで及んでいない。想像するに、授業で聖書を教え、また学内礼拝で説教したりしている点から考えれば、吉川起行はキリスト教の指導者として招かれて活動したように思われる。前記したように若い生徒や卒業生たちには多大の感化を与えたが、学校の教職員たちには必ずしも好感を持たれてはいなかったようである。それは彼の性格にもよることであろうが、一半には彼の学校内での身分や位置づけにも原因があったのではなからうかと推察される。

「翁と私との関係の始まったのは慥か（童安の書込み「大正十二年九月以後」）関東大震災の翌年からではなかったかと想ふ。ハッキリした記憶はない。そのころの翁は『使命』といふ労働運動の雑誌の主筆をしておられたようである。毎号キリスト教社会主義の立場から翁独特の主張を當時の社会（唯物論的社会世相）に対して発表して一歩も退かず、又非妥協の烈しい精神を発揮されていた。爲に、當局の忌避にふれて発売禁止の厄に逢はれた事は、自分が直接に知っている丈でも数度あった——と記憶している。その『使命』発行時代の翁は正にラスキン翁の面影があった一種の預言者でもあった。」（『日々の糧』「書」の後に「編者、宮崎安右衛門誌、三〇四頁」）

童安の「大正十二年九月以後」という書込みと尚綱高等女学校の記録とは時間的に一致しないが、童安も「ハッキリした記憶はない」と記し

ているから、童安の書込みの日時もあまり正確ではないかもしれないものの、わざわざ後から書込んでいるのだからそれを尊重すれば、吉川一水は尚綱に籍を置いたまま、大正十二年の九月か八月頃に東京に移って来ていたのかもしれない。或いは「江戸っ子」の一水は東京に住居を以前から持っていたのかもしれない。いづれにしてもこの間の正確な日時は確定できないが、東京での活動は尚綱高等女学校辞任後引続きであったと推定される。

「翁は江戸っ子である。さうした性分が鋭い人に負けじ魂が頑固にあった。それだけ強い性格の所有主であったが、アル仁は翁を評して禪的基督教である、といひ、またアル仁は臨済將軍の風格がある——とも言った。それほど鋭い機を藏しておられた翁が脳溢血にかかられ半身不随となるや忽如として内へと深く沈潜してゆかれた。「生と死とはいつも対面していると、死に面する生のみが力ある生となってゆく。死に直面しをらざる生は生に非ず——」とまで言はれた。そして、それ以来、翁の信仰は文字通り一期一会といった風に進展して行った。そのころの翁は大隈言道の歌

今日もまたわが家にわが身帰り来ぬ

かぎりの門出いまだ来ずして

といった消息に呼吸してをられた。所が有難いことには静養のおかげで再び杖に縋ってドウやら歩行の出来るやうになられた。そして、再び一如洞へ毎月一回第三の日曜午後に聖書の話をされるやうになった。そのころの翁の風格は「明澄」といふ二字に尽きている。急がず、慌てず、騒がず静安そのもののやうなおっとりとした落ちつきと犯し難い凜とした、

た、而も淨らかな鶴のやうな風格がおのづから染み出て私達聴聞者を森とさせた。……」(三〇七—八頁)

少々長い引用となったが一水の紹介と病後の変化を如実に伝えている。一水の脳溢血は第一回が昭和十一年六月、第二回は昭和十三年十月で、第二回は比較的軽いものであったらしい。一水は『光へ』誌(成瀬慶子主事、岡本文弥編輯)主催の聖書講義(毎月一回)を昭和四年二月から六年二月まで担当してマルコ福音書を講じ、その後小関太平治宅で約半年間創世記を講じ、さらにその集まりは童安の一如洞に引きつがれて昭和五年から十七年の暮頃まで続いたという(この間の日時の重複その他の事情はあまり明確ではない)。童安によれば、同志の人々は直接翁の宅へ伺って話を聞くことを楽しみとし、一水の健康が回復すると再び一如洞へと出張するようになったが、「だんだん老境に向かわれたのと、一つには乗り物が非常に混雑して来たのとそれに翁の視力が衰え始めたのが原因となって、爾来昇天されるまでは遠出される事は殆どなかった」(三〇八頁)という。

童安所有の書込みのある『日々の糧』には口絵写真があり、一水の五十才前後の肖像と筆跡写真、裏には童安の筆跡写真が出ている。ところが私が古書市で入手した同書は同じ初版第一刷なのにこの口絵写真は欠落している。調べてみても脱落したのではなく、始めから無かったやうに思われる。二種類の版本があったのであろうか。他の本文の内容・印刷などは同じである。それはともかく、その口絵の肖像を見ると縁なし(或は銀縁)の眼鏡をかけて銀白の髪は真中からきれいに分け、眼はしっかりと正面を見据えて、口は固く結ばれていて、見るからに秀才、エ

リート紳士、謹厳実直という風貌である。彼のキリスト教入信の動機、経過など不明であるが、童安も知らないと言う。今少し童安に紹介して貰おう。

「元来翁は極端に教会的キリスト教を嫌っておられた。その点翁は聖書のキリスト教、純福音を信奉せられていた、と言って内村一派の無教会主義キリスト教でもない。飽くまでも日本的キリスト教を標榜してをられた。そして、自由に佛教わけても禅と浄土教に関心を有たれた事は本書の感想に往々その点にふれてをる事で読者の気づかれた事と思ふ。

晩年翁はカトリックに帰依されたい。カトリックの神父が翁の宅に出入りするやうになり翁も亦親しく神父に就て学ばれたらしい。その事は未亡人の口を通して私は始めて知った。日誌にもその事、消息が誌されている。翁の信仰は単なる思想や知性やこの世の道德、宗教を超えて幼児のやうな素純なウブな、もはや理屈のない境地に悠遊せられた事は私をして驚歎せしめた。アレほど英米の教会のキリスト教を嫌った翁、また儀式的ドグマ的カトリックを無関心に視てゐられた翁が、晩年カトリック的信仰になじんで往かれし消息は恐らく第三者の窺知しえぬ事かもしれないが、翁としてはもはや理屈や感情を超えて、赴くべき所へ帰家穩坐せられたのであろう。何としても六十六年間の信仰の生涯は勝利の生涯であった。翁の性格にも相當の矛盾はあった。否定されたかと思へばスグと肯定されたやうな事も往々あったが矛盾は生命に生くるものに取つては飛躍の機会である。生命夫れ自体が矛盾を内含してゐる。その矛盾は真剣なる求道人にとっては辿らねばならぬ必然の経路でもある。然しながらその矛盾をとほして誠に晩年は夕焼けのする大空をおもはし

める静けさと魂の郷愁の犇々と迫るの感を私は翁に接して印象させられた。噫！小児のやうな心境にキリストを迎えられた翁、もはや其処には神の国の穩かさのみが光っている。恩恵による永生のみがあった。吁々烈しい鋭い性格の翁の晩年はかくて春のやうなぬくみと一切肯定の悲願に生きられた事は、私をして賛嘆随喜せしめずにはおかない。

翁ほど何かにつけて神の恩恵を沁々と感得感謝されし方は恐らくなからうと思ふ。今、筆者は擱筆するに及んで、翁と私の信仰上の關係を追憶する。その深切な指導と時にはきびしい策励とを感謝せずにはをれぬ。この点涙なしにはかけぬ。慥かに翁の信仰の伝統は今日の私に少なく共及んでいる事を正直に言っておく事を拒むわけにはゆかぬ。それほどの影響を私は翁より直接に受けた事を甚しく喜ぶところである」。

『日々の糧』三二〇—三二二頁

童安の文章は句読点の脱落などのため解りにくい箇所もあるが、晩年の吉川一水の内面状況については最も近く、また詳しく、理解にみちた眼で見守っていたのは童安であろう。童安にとって幸せであったことは、一水が日本の心情を抱きつづけ佛教にも深い関心を持っていたことであつた。『日々の糧』の日記の中にも、盤珪、一遍、蓮如、親鸞、道元、無難、如浄、明恵、臨濟、法然などの名が出てくるし、不立文字、千聖不伝、自らの計らい、見性成佛などの佛教用語がよく用いられている。今日ではあまり実感をもって受けとめられないことであろうが、戦前の日本人キリスト者にとって佛教とキリスト教の比較・二者擇一の問題は避けて通ることのできない関門であつた。また、明治大正、そして昭和の初期においては（あるいは今日でも？）キリスト教、あるいはキリス

ト教会は常に西欧的イメージをもって一般人には受けとめられていた。

また教会に出入りする人たちも一種違った眼でみられていたし、中には実際に一般人とは異なったムードの人もいたであろう。そうした類の人の中には西欧カブレとか社交的とか柔弱とかいった言葉で批評されるタイプの方があった。しかし今日改めて振り返ってみると、教会の門を叩く大多数の者は日本の近代化の中で人生観や世界観の悩みを抱えた思想的求道者であつたように思われる。西欧的、あるいは宣教師のキリスト教会の内部は、明治の初めならばいざ知らず、峻厳・沈潜の求道精神が讃美歌やステインドグラスなどの明るい異国的ムードによつていつしか変質させられたり、最初の問題意識を忘れさせてしまふ、といった面がなかつたであろうか。それらのことは北村透谷、島崎藤村、国木田独步、正宗白鳥、亀井勝一郎……など先人の歩みを辿つてみるときに明らかであるように思われる。これに対して内村一派の無教会主義は宣教師を排除し日本的求道精神を中心に据えたと言える。ムードとしては日本的求道者には赤レンガの教会や宣教師の片言の説教よりはもっと親しみ易く直接に問題意識をブツつける場でありえたらう。それは人生論を中心とした儒教的講筵の雰囲気とでも言えるのではなからうか。洋行帰りの一水は西欧型の教会を嫌つたという。それはアメリカの教会の社交的雰囲気に対する反撥であつたのかどうかはわからない。だが同時に彼は無教会主義にも反撥している。

「 二七 巧妙なる悪魔教

日本に於ける無教会主義のU教は最も高尚なる意義に於ける現世利益宗である。幸福を目的とするものである。U教は人世の幸福——正し

き国の樹立が目的となつてゐる。是れ実に最も強力なるサタン教である。これと戦ひこれを破らなければ神の国は覆滅せらる。健全なる生活、少なき慈善、正義の樹立などといふ、これ皆サタンの叫び聲である。」(二九五頁)

無教会主義に対するこうした批判は案外に珍しい視点ではなからうか。

無教会主義は聖書研究を重視し現代社会に対する預言者の言説が内村鑑三以来顕著である。それを一水は「最も高尚なる意義における現世利益宗である」と決めつける。一水は無教会主義の根底にある現世的関心、儒教的修養道德の人格主義を嗅ぎつけて批判し、イエスの教えと似て非なるものだ、と断ずるように思われる。同様のことは松下村塾批判とも通じるように思われる。

「 一九六 童心

童心にあらざれば神を知ること能はず、されど童心は屢々奸譎なる蠱惑者に欺かれることがある。我らは童心にして神の智慧に育くまれねばならない。学校教育を受けてゐる子供の如きは、その功利主義教育に依り、神を知る資性を傷つけられ、又世の奸計に最も欺かれ易いやうになつてゐる。社会のため、国のため、偉い人、を目標とする教育はサタンのものである。松下村塾の教育の如きはその善き實例である。」(九三―四頁)

これは昭和十四年の日記である。第二次世界大戦勃発し、日本も益々戦時体制を固めつつあつた中で、教育・社会全般にわたるイデオロギー統制への憤激の声であらう。しかし、軍国主義も無教会の修養的人格主義もこの世に基づく人間中心のイデーとしては同質のものにすぎない。

「自ら預言者と称して教へ惑はし淫行をなさしめるものは今のキリスト教である。世にいろ・眼を使ひ之と淫行を為すものは凡ての宗教であるキリストの福音ではない」(十頁)、「キリスト教会が現世のみを見、ただ現在生活に対する教訓としてのみ之を説いているから、聖書は死せる書となっているのである」(十三頁)、現代の教会は十字架に死んでの眞の捨身や永遠の生命を説かない、従つて復活や奇蹟などキリスト教の中心的メッセージが躓きの石となつてしまつてゐる。この世と神の國、自我と神とを混同詐取してはならない、「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に」は普通宗教家の解釈するような宗教と政治の分離を意味するものではない、一切は神のものであり、神のものならぬカイザルのものがある筈がなく、カイザルに属する一切の権勢は神の支配下に隸属すべきものである(序文 新居格)。聖俗三元、靈肉二元をサタン教として拒け、聖俗一元、靈肉一元を主張した一水に「貧者道」に生きた童安が深く共鳴したのは当然であつたであらう。一水は信仰は普段着にならねばならない(十一頁)、なじむということが大切だ(一五〇頁)と主張する。信仰は禪宗のように觀念の悟りではなく、浄土宗のように彼岸の世界でもなく、西欧的教会のようにムードや社交でもなく、無教会主義のように信仰の名を借りた精神的教養でもない。信仰は現実日常の中で神の臨在を体験し神の支配の下に日々従属することである。

童安も記しているように、一水は以前は合理的信仰であつたが晩年は非合理的信仰へ、即ち、理性的哲学的宗教理解から啓示的恩寵主義的福音理解へ、の変化があつた。一水自身も記しているように、以前はイエスがキリストであることや奇蹟などは「色々と解釈を考え、詭弁的論拠

を作つて、それを価値づけて來た」(一二九頁)、「さきに驚歎なくして受取つたクリスマス。今はそれが驚歎となる。人間に神が示され、現実に、目のあたりに示され、救主として來り給ふ！ 來りて世に居り、人の生活に居り、交り、ついに世のために死して復活し給ひしと言ふ。これなくして我らは神を知る能はず、またこの世に希望を有ちて生くる能はず、イエス無くして人間は救われず。ああ、ただ驚歎！ 驚歎のみである。」(一三〇頁)

「イエスの顯現なしの凡ゆる教説、哲理に依れば、ただ思弁上の人間が言われてゐるだけで、人間に非ざる個体的なる我といふ人間は知られず——人間と神との關係、或いは自性、本来の面目とかいふ單なる思弁上の命題が示されただけで——に終り、我と神との交りは遂に出来上らなかつたのである。イエスと福音書(啓示の書)の現はれにより、一切の教説、言句の固体化、変型化、死化、歪化(必然的な)より免れ、ただ活ける神の御姿に接しえたのである」(一二五頁)。「イエスが神の独り子たる事を今日瞭らかに示さる。證據あるに非ず、理論があるにあらず、我の裡に於て同時に外に於て、その然るを示さる。萬物は彼を中心として動き、彼を中心として創造されてゐる事は疑ひえざる事實である。之を疑ふといふ假定も許さるべくもなく存在しえない。それを觀念的に疑ふとしたら觀念が成り立ち得ない。その様な觀念を成立させようとする人格の分裂を來す。(萬物は彼によつて造られ彼の為に造らる)。(コロサイ書一ノ一六)(一二二頁)。こうした一水の語は甚だ興味深い。かつては恐らく多くの宗教の中の一つとしてキリスト教を選び信奉し、キリスト教を通して宗教一般を思弁し理解していたのであらう。それが啓示中

心となったとき、一切の神についての思弁は空無と化してしまう。神という語はあっても、元来神という実体は存在しない。ただイエスを通してのみ神は顕され、イエスの存在を通してのみ神の生命は我々にも流れてくる。「人間に非ざる個体的なる我という人間」はイエスを通してのみ初めて明らかにされる「神の子とされた我」、赦され贖われた新生の、且つ創造時の本来の霊的存在を表現しているものと考えられる。一水は今までの「五十年は試みであった。……試みの五十年は全く酔ひどれてい」としか思へぬ。記憶さへハッキリせぬ。……今にして見れば、その最も明るい日も曇天であった。晴天は今日始めて見た。晴天と曇天の区別が分かった。過去に一日も晴天はなかった。噫！ 風雨激しく、天地晦冥の日も、なほその暗さを知らざりし過去の日よ。神よ、我を試みに遇せ給ふなかれ、悪に陥る恐れあればなり」（九五―六頁）と語る。こうした迷妄の今までの生涯への反省は屢々記されている。それはまだ自己が見えていなかった、意識も自覚もなかった、それはイエスによってのみ神に触れる、自己が生まれるという経験をしていなかったからだ、というのである。しかし同時に、引用した文中にもあるように時としては観念的なものを見、考えるという脱ぎすてた筈の姿に戻る危険も常にあった。日々恩寵に生きる、福音の中においてすべての肉の現実を生き抜く、ということはそれ自体日々奇蹟を体験し生きるということでもある。そうした霊的足跡（昭和十三年十二月十七日―十八年十二月、補遺は十三年六月―十四年十二月頃までの別のノートに誌された感想）の記録が『日々の糧』であり、戦時下の食糧難などもあって、隠退、しかも脳溢血を患った一水は生活的には随分窮乏し、時には納豆売りなど

までしたようであり、経済的に生活力のなさのためか家族から非難されることも多かったらしい、そのためそれまでの日記の題を『日々頂戴献立書』（昭和十四年七月十八日以降）と変えた本書の内容である。『日々の糧――永遠の恩寵』という表題は恐らく編者である童安がつけたものである。戦時下の大政翼賛会や「欲しがりません、勝つまでは」や皇国基督教会などに対する批判も散見するが、全体としては驚くほど時事問題は取り上げられておらず、専ら内面的な恩寵の問題を記しており、一水が徹底して反戦平和主義の姿勢を貫いていることは改めて言うまでもない。

一水のこのような信仰は心靈主義的神權中心主義とでも呼んだら良いのであろうか。新井奥邃などと交流があったのかどうかも詳らかにしていないが、興味深い信仰姿勢であると共に、前述したように、現実の日常生活の中でそれを徹底させるためには幾多の困難もあったであろう。特に戦時下の物資窮乏・思想弾圧の状況にあって、家族関係はかなり微妙な緊張関係や試練を一水に与えたようである。文中にもこの世の財や所有のこと、肉親との関係に触れたものが多い。

「今朝、家族一同と雑煮を祝ったが、今までにないほど、寂かで落ちついて善かった。五時に娘の八重子が起きて支度し、六時に自分が餅を焼き始め、六時半に一同起き、直行、えすてる、創造、幸子と六人静かに言葉少なく（然し一同楽しそうに）食べ、七時少し過ぎに終り、子供達はそれぞれ学校へ行った。良い朝であった。この静謐は神よりの賜物である。……」（昭和十五年一月、一三二頁）。

一水の文中には「亡妻」という語があり、童安の後記には「未亡人」

の話があるところから想像するに後妻があったのか、その人の名が幸子なのか誰なのか、不詳である。また文中に「息子^{ミコ}の軍装品代」を工面するため腐心する話も出てくる。S子とは誰か（二〇頁）。

一水の信仰は必然的に日常生活の中で「いのち」を瞑想することに集約されて来る。いのちは、神の生命であり、わがうちに息づく生命であり、自然草木の中に動く生命であり、また路傍で無心に遊ぶ童らの生命でもある。一水はそれらの生命の動態を見つめ、直観し、思念する。それを「聖氣^{イキ}」と呼び（一〇九頁）、父の家に住んでいる現在、神の子とされている現在を戦時下の騒しさの中で体得し、意識する（一二六頁）。私が先に不十分な表現ではあるが「心靈主義的神權主義的」と評したのはそうした意味においてであった。直観と思念は交錯し、禪的なものとは異なったものではあるが、キリスト教的な一種独特な世界を展開している。カトリックではラテン教会の伝統において神秘主義を *contemplation* と呼ぶ（Raymond Bailey: *Thomas Merton on Mysticism*, Image Books, Doubleday, 1987, P.20ff）。一水が晩年カトリックへ傾いたというのは、右のような精神的構造の親近性のゆえではなからうか。

一水は六十才前後、書込みをし繰返し愛読している童安も六十才から七十才にかけての頃である。はからずも私も略々同じ年令にあって二人の文を大変身近なものに感じつつ読んだ。若い頃に考えたこと、自覚したかのように思ったこと、それらは今から振り返ってみると大地に足がしっかりとついていない陽炎のようなものでしかなかった、一つ一つの記憶さえ定かでないといった砂をかむような述懐、そして、真実なあるもの

が見えて来ているのに今尚心が定まりきらず、我ながらもどかしい想いをしながら世俗雑念に乱され、必死になってあの根源的な生命に満てるものへ復帰し集中しようとする日常的な努力、そうしたことがらは深い共感をもって受けとめることができる。更に一水は「死」の問題を繰返し語る。脳溢血で九死に一生を得たという出来事はもちろん大きな比重をもっているに違いないが、一水が問題にしているのは単なる肉体的生死ではなく、霊的な生死であり、しかもそれは現実的な肉体の生死を通してのみ具現され、明らかにされる事情にある事柄なのである。一水の記すところはいろいろあるが、その中の一例として左の文を掲げておこう。

「元始^{はじめ}に神天地を創造^{つくり}たまへり」（創世記一ノ一）を眞^{まこと}に眞^{まこと}なりと知る（感じ知る）。天地の創造主たる神を知することは、世界を一変し一新す。随って人世観と世界観とは慥^{たしか}かに重ならぬ、一筋であらねばならず、力強き唯一の生命に立脚したるものならざるを得ない、いつも自家に穩座し、天地を楽しむものとなる。この神を肉体に於て認識し表現し、眞に創造主の子たることを肉に於て示したる者はイエスである。イエスを知ることによりて創造主を知る事ができる（この事以外に創造主を知ることとは不可能である。肉に於て知ったのでなければ眞に知ったのではない。）今晚三時、自分は創造主に造られしものたるを感ず。生を享けてこの生の創造主を知りえた事を感謝す。子としての生みの親を知りえた事は大きいなる喜悅である。

釋迦は生老病死に無常を感じて道に入りしは人としての最高の道程を踏みしものであらう。イエスは野の試みより神の子として歩み出したの

である。下より上りしと上より下りしとの差である。

神の子たるや否やは（創造の子たるや否やは）生活苦のあるや否やによりて知らる。（是れ最も明らかなるしである。）また創造し給ひしのみならず、今も猶創造主として働き給ふ。イエスは「我もまた働くなり」（ヨハネ傳五——一七）と言つてゐられる。この偉大なる安定感こそ根本的の安定（安住）感であつて、世界は寔に寂光の内に包摂されてゐるのである。

何の不平不安あらんや、一つとして栄光のあらはれざるはない、而して父子一如の喜びの時ならざるはないのである。（刻々への創造に於ける参畫、共働、これ愕くべき意識である。）」（二六〇—六二頁）（註・昭和十七年十二月）

三、一水と童安

童安にとって一水は最も身近な、また適切なキリスト教信仰への導き手であり、先達であつた。そのことは童安自身が認め、書き残しているところであるが、その共通点をまとめてみると次のような事柄が挙げられるのではないかと思う。

一、日本の求道者

日本人の心情や佛教その他の宗教的地盤や伝統を踏まえて、なぜキリスト教（むしろなぜイエス・キリスト）でなければならぬのかと、求道漂泊した。それは禅的悟りや浄土宗的帰依感情などと絶縁し福音的啓示への困難な飛躍（そのことは神の恵みによる）への彷徨であつたと言つてよいであらう。

二、イエス・キリスト論

その中核となるイエス・キリスト論は西欧の神学的ドグマによらず、極めて日本人的な心情による把え方をした。徳富蘆花や有島武郎などに見るようなトルストイズムのヒューマニズムでもなく、綱島梁川のような神秘靈感主義でもなく、また無教会主義などのような教養主義的人格論でもなく、当時の日本のキリスト教の流れの中にあつては一種独特のキリスト理解であつたと言えよう。もちろん、彼らのキリスト理解は十分徹底完成されたものとは思えないが、そのため後に見るであろうが彼らの信仰は啓示と人間的宗教理解（禅的思弁と浄土宗的帰依心情その他）との両極を揺れ動くことも多かつたように思われる。

三、強烈な個性と独自の求道姿勢

一水も童安も強烈な個性をもち、それぞれが自分の生きざま、求道の軌跡をもち恐らく互いに相譲ることもなく、また相手に強いこともなかつたのではなからうかと思われる。彼らは師弟ではなく、求道の同行二人であり、自由人であり、あくまでも自分の足で自分の生を探索する人であつて、知識や教養で自分の宗教感情を満足させるのではなくて、自らの実存の救いを現実の中で追い求めていた人であると言える。

こうしたことは反面、彼らの相違や誤解も生み出しているように私には思われる。最も大きな点は、一水が前述のような信仰内容から必然的にそれを意識的に整理し思惟し、さらに論理的に展開して、より堅固な創

造論や救済論を構築しなければならない問題を抱えているのに対して（一水自身が自覚的にその問題の所在を意識していたかどうかは別として）、童安は十分そのことを理解しないで、両忘とか捨身とか、ともすれば禅的觀念止揚をもって批判することがあったのではないかと思われる。このことの背後には両者の教養や学歴の差がすぐ指摘されるかもしれないが、私はそれ以上に現実体験の差があったと思う。一水はエリート紳士として京大卒業以来、（個人的には自らの意に添わない状況があったとしても）社会的に安定した生活をして来たことであろう。晩年において生まれて初めて経済的貧困や家族問題や世間からの無視などに遭遇している。それに対して童安は若い頃から捨身の貧者道の実践をつみ、いわば野武士的な百戦錬磨の人であり、童安から見れば、一水の人格や教養は尊敬すべきものであったとしても、現実の苦難や試練に対する一水の対応の姿勢には甘さや弱さを感じられたのではなからうか。しかし童安にはそうした倨傲や距離感は少しもなく、常に先達として暖くまた謙虚に兄事している点は、流石に童安と感心させられる。経験とか思惟という問題は大切な問題点であるが、一水と童安との具体的な関係の中でそのことを分析追求してゆく余裕は今はない。概略の展望を左に記して、その具体的な内容を、童安の書込みを中心とした視点から少し詳細に見てゆくことにしよう。

一水は「夜中に必ず眼が覚めて、一、二時間、或いは二、三時間、澄み渡った心持で静かな時間を過すのを常とする」（はしがき）その間の感謝や祈禱や啓示などの覚書を残した。それを一水の死後、童安が編輯して出版したのが『日々の糧』であり、先に記したように昭和三十二年か

ら三十七年にかけて特に頻繁に童安は読み返している。童安六十九才から七十四才の頃のことである。童安は信仰に関する著作としては戦後『キリストの福音』（昭和二十三年四月）を出版し、詩集『信仰の悲しみ』（昭和二十七年九月）などを出しているが、彼の晩年の最重要な著作『地獄の聖書』の構想は、福田與『満天の星を仰ぎて』（昭和六十一年十月）によれば、昭和二十七、八年頃に宿って、童安は自分のイエス伝を書きたいと語っていたという。その原稿が大体出来上がったとして福田與と童安が連れ立って久々に高田集藏を訪ねたら、その日、昭和三十五年十月十日は高田集藏の葬儀の日で茫然自失して佇んだという。また、昭和三十七年十二月に福田與が上京して童安を訪ねたら「人格神が信じられるようになった」「今はもう自分の住む世界はなくなった」等と語ったということである。

童安の福音理解、人格神信仰は最晩年になって漸くに定着していったと思われるが、本書への書込みを辿ってゆくと、その折々の童安の揺れが感じられて興味深い。表紙の裏に「本書の有つ唯一の缺点是恩寵々々というてめそめそと泣言を吐く翁の一面である。以ていかに翁が恩寵に叛逆せしかを知る。神はめそめそと泣いたり愚痴るの徒を斥ける。遊女の口説文句みたいでイヤラシキ。」恐らくこれはその左頁の書込みと同じ三十一年九月彼岸日の書込みではなからうか。

「 九、年頭所感 十四年一月

元旦、早朝三時―四時、暗黒の内に太陽を見る。ただに光のみならず温みを感じず。神は肉眼にて（人の眼）見えざれども見ゆるものである。而もそれは光として見ゆるのみならず、温みを與え給ふものである。

夜静か太陽を見るあたたかさ

佛教は光を示したかも知れぬ。然しそれに温みはない、温みあることにより、「光り」は全く性質を変へる。即ち釋迦の見た光りは断じて神ではない、佛教は人間の方から辿りついた光りである。イエスは天より人間に現はれた光りである。熱である。天より現はれた神は是れ以外にない。(ヨハネ傳一ノ一四参照)(九頁)

“他宗に対して云々せられた翁は感心せん。自分の珠の目を大切に育ててゆくのみで他宗は完全にさばかれ批判されてゆくのだ。喝ッ!”

一水の問題意識と童安のそれとの微妙な喰い違いを見ることができであるう。

“忘貧ハ忘信ノ賜モノトシル。真ノ信仰ハ信仰ヲ忘ルナリ。忘信コソ尚ブ、アリガタシ。三五、一〇、一九”(一水の信仰は平常着、無銘の品の如くならねばならぬという主張に対して。十一頁)

“無所有で不足なし。出入空手。空手出入。心身脱らく。脱落心身。

手放し。無一物中千變万化の妙を観る。無一物に神は働きたもう。三六、

一、二〇”(十二頁)

“自忘で一切はととのうと決定す。規則により行動しない。衝動ニよって行うのみ——” “生命の必然に随うて行動する大用現前、無規則。”

(「隣人愛」に關して)(二二頁)

“たべることを忘れている人は倅せでアル。九十九パーセント忘れない。たべる事のためにハタライテイル。之では忘れないのが当然である。アア食を忘る人こそ幸福で天下の富豪であろう。神と共に呼吸してゆく人は忘却の名人である。第一に己れを忘れて、いわんやその他の

ことをや。” “葉は一日分、明日は明日一日分”(「日用の糧」に關して)

(二六—二七頁)。

“翁ハイエスに止まってイエスよりハナレなかつたので、イエスのキリストなるをハッキリ知らないで終わった。惜しい。多くはみな止まる。ハナレぬ処に法執をみる。三五、三、七(三〇頁)(「我は門なり」に關して)。

“人間に眞実なし。眞実ハひとり神のみ(キリスト)、即ち己が生命を他の賠償としてささぐる”という事は人間不可能なこと。ひとり神のみ贖罪を完遂したもう。翁のこの言は誤りである事を知りえた。少々傲慢となった。惜しい。”(三二頁)(「愛するといふこと」に關して)。また同頁に“眞に愛しているものは愛という事を忘れて愛を行っている”という書込みもある。

“風性常住、無邊不周は禪の公案にあるが、前後際断して風性を見ることにより「見ゆるものは頭はるものに由りて成らざる」を知るに役立つ”(三四頁)

“みること文では概念ニすぎぬ。風性を自由自在に使うことに由つてのみ風性の恵みをする。イエスのタラン(ト)の預けおきし番頭をみよ。単に見るでは何の役ニもたぬものとなる。一水翁この点に不注意なるを知る。”

“絶対客観に物を見ることが出来ることは神を知って初めて可能なことである。神を見ることが物を正しく見ることである。花にある生を見ることが花を見ることである。”(三五頁)

“世に絶対主観も客観もない。両忘者のみ良く随処に神をみる。”

「……神の栄光は直接大地に接してよく知り得るのである。神の栄光と知らずして被造物の美は知り得ない。神は直接以外に接触し得るものではない。凡てのセコンド・ハンドは虚妄である。」(三五頁)

「ぬしありて見聞するは非である。無分別これ真の分別となる。無意識これ真の意識となる。」尊徳翁のいう、天地にありて不書の経文をよめと。

「信仰は人を孤独にする。神を語ることが多ければ多いだけ、人を語ることが少くなり且つ語ることの少きところに言ひ知れぬ喜びを感じる……。」(三六頁)

「神を語ろうと人を語ろうと自由自在。一字不説の境地にいないと神と人とを分ける。翁はこの二元にいたらしいから観念的な饒舌となった。」

一水と童安のこうした奇妙な喰い違いは随所にあるが、前述したようにそれは問題の視点のズレと見るべきであろう。

「生命はイエス以外ニないという一水翁の境地は法執に囚はれていた人だ。惜しい。なかなかこの法執はとれぬものである。この一関を超えたら平常の人となる。比較の必要はない。とかく人間は比較したがるものだ。めだたぬ人となるのがよい。めだつ内は修行未熟の人であろう。平常着がよい。」(三九頁)

「翁は正義派の一人に危く転落するユウモアをオレは見て笑うた事もあった。信仰というものはヘタやると人を倨傲にするものらしい。」(四三頁)

「えらくむつかしいりくつを吐く翁のりくつを忌む。」(一〇〇頁)

「心身ともカラッポとなることである。神中心の信仰だ。ぬしなくて見聞覚知する謂である。ぬしなければ佛魔の相がよくハッキリと判る。魔を斥けず佛に執せず、淡々如水。」(一五五頁)

「敵を愛せよ——とイエスはいうた。翁にして家人の侮蔑を忍んで愛しゆくの信あったら、かほどまで無視を気にする必要はなかったであろうに。噫!! 翁のもつ宿業の一つだ。家族らの翁への無視はパンからだ。パンを家人へ與へなかったからだ。このことは私もつよく体験した。ソレハ終戦の前日の時だ。」(一七七頁)「從順の力」に関して

「言の元ハ息だ。翁は結果たる言のみニ執して原因たる息に省悟ないのが惜しい。」(一九二頁)

「自力は自力の無効を知るために必要であろう。自力・努力をしたものでなくては他力のありがたさ、その恵を痛感しない。一水翁などは自力党の大將株であったが故ニ自力の悲惨さを知って他力回向の恵みに帰依した。この点を知ってをくと具合よし。しかして他力に執し囚わるるも又これ自力であるを知るがよい——本来両忘。三十二、十、二十一。」(一九五頁)

「両忘とハ自己のハカライでするのでない。神を信じて自己を空じ自己を忘るるのである。三十五、二、九」(同頁)

「福音ハ宗教のいう自他を超へた特別な回向の発露である。三七、三、七」(同頁)

「翁の十字架は近親ニより負けせられた。汝の敵ハ汝の家の者である。吁、何という悲壮なことか。是らはオール「食」に由来している。老いて食を他より得るの力無きとき、家人より厄介視せられるのでア

ル。オウなんという宿業か。是もまた自業自得の招くところ歟。我も不知轡山節にちかい悲劇が食ニよって生まれてくるらしい。”(二二五頁)

“この世の経済学では人間を物的視する。神の国では反対、九十九をすてて一人を守る。”(同頁)

“翁と家人との対立に悲劇を見る。オレもまた然り、これ日々の十字架である。三七、三、一七。三七、八、二五。”

“イエスによりて父のコトバや慈潤がわかる。イエス・キリストぬきにしては父は判らぬ。イエスをとおしての父なる神との交わりだ。翁はイエスをぬきにして直接神と交わる。仲介を要さぬ。その信仰は人間本位に傾いて危険この上もない。ヘタすると倨傲に陥ち入る。”“生命というがこの生命という抽象性への思惟が自力的である。一人角力だ。哲学化だ。イエスをとおして神との交わりのみが永遠の生命に直参しうる——。三三、一、三〇。三七、三、二四。”(二三三頁)

童安は一水のもつ本質的な脆さと危険性を直覺的に嗅ぎとって批判を加えている。同様の脆さと傾きを童安自身も持っていたからであろう。だが童安は一水よりも長い期間にわたってその接点で漂泊流転した。それだけにこの間の消息には鋭敏であった。だが童安自身も常にその点が明確であったかは疑わしいように思われる。次の書込みなどその例と見ることができのではなからうか。

“神を尊み神にねがわず。翁は神に乞ひ神にもとめ神に祈っていられた。その神が翁を苦しめた。翁が神すら棄てて空となられたならなァ——と泌々おもう——不可能だ。”“己れがあれば是非がみえる。無ければ是非なし。本来是非なし。何ぞ都合・不都合あらむ。都合や不都合のみ

える内は大いに修行せよ。”

しかし同じ頁(二三六)に“世を捨てて神につく、神も世もすてて両忘するという禅的思索はサタンだった事ニ反省させられた。三三、六、四。三十三、一、三〇。”と記しているのである。

“翁はあまりニ神というものに囚われてつかれている。神とは生命である。生命はつねに流動している、固化していない。神という概念に囚われてはオシマキである。イエスの神はいつも今日ニ示現してる。”(二三八頁)

(昭和十六年日記の終りの空白の箇所)“翁は大学出の人、佛法科出の秀才だけに学問が邪魔してる。法然のように一文不知の厄人道になりえなかった。吁。棄つるということの如何にむづかしい事か。キリストのアトをもとめて生きられた人。ナゼ、キリストの求めたものを翁はもとめなかった乎。翁はキリストの残飯をたべて喜んでいたものらしい。焚き立てのホヤホヤをたべる事を神もキリストも望んでいるのに。惜しいことにはドイツもコイツもオール残飯を拝んでいる。オウ汝、死者よ!!だが死の一步前で翁は完全にキリストの徒となった。”(二三九頁)

“翁は夢示ニ由ツて観念捨身の無力より現実ニおける真の捨身行まで進まれて遂に永眠された。翁の晩年ハマコトに内面的烈しい葛藤に始終された。ここに悲劇と最後の穩坐をみる。”(二五八頁)

“松ニツル 竹ニ虎 梅ニウグイス

霜ニ一水翁を仰ぐの妙々。

桃の花ニ童安ハ似てるとの評ハ村上華岳の言である。”(二六二頁)

一水の謹厳峻烈な面を霜に、童安自らを桃の花としているのは両者の

ひととなりの相違を示して興味深い。先に一水批判の童安の書込みの主なるものを抜き書きしたが、一水を敬慕する文はもっと多い。先の拙論で『イミターショ・クリスチ』と『詩篇』への童安の書込みに関して記したが(神戸女学院大学論集、第三十四巻、第三号、(通巻一〇〇号)一九八八年三月二十日発行)、その書込みと比較するとき、一水に対しては友人・先達に対する心安さがあり、親しきがある。一水の文に触発されて童安は信仰について改めて考え直したり、日常を振り返ったりしては自由に自分の感想を書き込んでいるの感がある。特に「所有欲」「貧しさ」「知足」「この世」などについては共感共鳴のことばが多いし、また「饒舌」「多弁」や「冗談」を戒める一水の謹直なことばには、童安は首をすくめて神妙に反省恐縮している感がある。「神をしらぬもの、信ぜぬものに落ちつきはない。一水翁は象のように落ちつきをもっていられた」(二〇七頁)と、飄々乎たることをむしろ誇っていた童安にとっては異質に感ぜられたであろう一水を讃えている。

「人間(固体的な人間)は国家、国民、教会、宗派等団体的、社会的に概括される事に依って人間でなくなる。人間は固体的に打ち砕き、散乱せしむる事に依って一個一個の場合人間である。」「白露や茨の刺に一つづつ」(蕪村)。能禮所禮性空寂、感應道交難思議。天臺智者大師の水上昇せず、月下降せざるも、一の一時に月普ねく衆水に現ず、の如く所々の水に時々ときどきの月を宿するのである。玉の動きによりて光を発す。(光りは玉の動きにある)。(二二八頁)

「トゲが神である。トゲが印刷化されぬ不書の聖典である」と書込み、
続いて

「日々十字架を負うて我に従へ」といふことは日々躓きがあること(躓きの可能性絶えざるものなる事)をハッキリと示しているのである。日々この躓きの可能性を経験せざる者は基督の徒ではない。」

「大小に拘らず示されし十字架は折って負くことですくわれている。この十字架は実は神そのものの、そうした神が一見イヤなトゲとして映ずる。ぐずぐずしてハ蒸発してしまうから早く負へ。スグそのトゲ(十字架)を負へ。負うたトタンに天国となる!! まちがいなし。」(二二八頁)

「……イエスに於ても彼の言葉や行為が尊いのではない。彼の生命(神)それ自体が重要なのである。」「寂寞と書間を鮓のなれ加減……」(蕪村)。永遠のうちに永遠を息づき、永遠になれ、永遠へと味つき、永遠へと同化しつつ遂に無限に永遠に入る。この人生、在りて在るもの(神)イエスは「言」であつた、教師ではなかつた、即ちイエスはキリスト(救主)であつた。」(二七八頁)

「と翁の信仰のほどを私は尊く思う。この信仰を私も又うけついでゆく事ニ私の生れでた意義をみる。イエス即是イキ、イキ即是キリスト・イエスである。三五、二、六。三六、三、一九。」

「イエスが「我が肉は眞の食物、我が血は眞の飲物」(ヨハネ伝六ノ五五)と言つたことは眞実である。イエスを薬味とし、味の素とし、ツマとし……即ちイエスを正味の食物とし飲物としなければ生命を得る事は出来ない。生命を生命そのものとして受けなければ生命の享受はあり得ない、この事を、しか為さなければ生命を汚すことになる……。」(三二二頁)

「私も今日までイエスを薬味として来た。之は自己中心の信仰より出てくるものだ。一種の修養的な手段として諸教を味うてきた。咄ッこのサタンよ!! 信心をアクセサリーとしてゆく処では人間中心の宗教となる。」

一水の生真面目なイエス・キリスト追求は、童安にとって誰よりも身近かな指針・先達となったことであろう。童安は己の不徹底さを告白し反省している(二二―二頁、その他)。また信は潔癖でなければならぬ(一八〇頁)、純なる信頼でなければならぬ(一五七、一六二、二二七頁他)などといったことを一水から学び取っている。

また一水は純粹さのゆえに感受性の鋭い詩人だと評価している(四四、五六―七、一一二、一一七、一二二頁他)。こうした面での共通点、共感性も童安にとっては大事な先達であったと言えるよう。

四、童安の魂の軌跡

「人は他力によって導かれ、教へられ、救はれるのである。然しそれを知り得る事は自力である。」「己を捨てて十字架を負うて従へ——」である。(二〇七頁)

「遂ニ自力他力を超へさせられて明るく自由自在ニ振(舞)い得るの恵みを蒙る。これ、あそびであり自由である。真理は汝ニ自由を與へんである。主客ニ在りて主客を超えさすモノ、之が信仰である。自力他力を忘るる。百事^不忘がよろしい。」(二〇七頁)

童安は屢々「両忘」という語を用いている。これは言うまでもなく対

立を超え、超えたことすら意識しないといった極めて禅宗的な心境であるわけだが、両忘とは即ち自忘自空であり(一五〇頁)、自忘は觀念や悟りによるのではなく、イエス・キリストによらねば不可能だ、ということも再三繰返して記している。「この自己を空に去ることは神に愛されているという信仰より生じた」(一九九頁)。また「両忘する」という禅的思索はサタンだった(二三六頁)という反省は前にも記した。また「両忘」というこのコトバのもつ巧みなる人間本位のづうづうしさこそサタンのささやきだ。オレトコノサタンの甘き妥協を随喜した事を悔い恥づる。オウ哲学ハ人間本位の功利的な思考である。三五、二、六」とも記している。一水に対して法執とか未到とかリクツが多いとか批判をしている童安であるが、童安自身もこの点不徹底であり、時間的にフラフラと動揺していたのか。さらに童安の考え方を追ってみよう。

童安は「身びいき」という語もよく用いる。それは自己中心、人間中心の姿勢を表している。単に自己の利害によって動くということだけでなく、恐れや脅えや不安も含んでいる。「身びいきの一念が財に執することとなる。神をもとむることも仕へようとする心も身びいきだ」(二九五頁)「身びいきは萬惡の根元である。身びいきするの必要なき世界へ新生すべし。これはイエスをキリストと信ずる信仰によりてのみ可能だ。三五、二、二五。一〇、六。三六、六、二九。三七、四、一七。」(二九四頁)「本具の身びいきである。身を思う故ニ財を恋う。第一にこの身びいきという惡鬼をキリストの力によりて追い出して貰わねばならない。自力では所詮不可能だ。信仰によってのみ身びいきを医していただけるを信ず。人間中心の生活より神中心の信の生活に入る事。」(一六九頁)

“神の力とは他ニなし。十字架を負うことの外ニなし。負うことの喜びを痛感せざる内はダメだ。この喜びを与へるものは自己ニなし、神の恩恵ニよつてのみこの喜びに生きられる。”(一九五頁)“神の国にいないと兎角祈念がでてる。いれば生死両忘だ。この両忘のところ妙々といいたくなる。”(二八一頁)“凡て人間本位の生活者は例外なく計算をする。この計算を無視するものが新生して神の国の住民となっている。”(二八〇頁)

「 神を拝む

神を拝することは、ただ一心に神を拝する事である。神以外の如何なるものをも拝しないことである。……(中略)……神を拝すると思ひて己を拝して居る事が屢々ある。否、最も真実なる者にして神を拝すると思ひて実は己を拝する者が多い。知識思弁の徒の全部は皆然然といつてもよい。己を完く殺すことが神を拝する事である。思ひ願ひ、欲望、要求、正反対に神が在る。全き対立(神と己との)は己が神と一つになったことである”(一九一頁)

然して己が十字架をキリストにおいて負うたときに神との対立はそのまま無対立となる。ゆえに日々十字架を負うことが真の礼拝となっている。自忘これ仰讃である。仰讃の在るところ万事とこのう。”

「信前信後

「己を棄て己が十字架を負うて我に従へ。」このキリストの言葉に於て「己を棄て」と「己が十字架を負ふ」とは稍々相近き意義のものの如く見ゆるも、心の動きとして格段と段階を異にす。「己を棄て」は内なる人と外なる人との區別を發見し、外なる人が内なる人の従となることで

あつて、神に対する服従の第一歩を示すことである。つまり内と外との關係に就て言つてゐる事である。之は信仰のそもその第一歩である。

この新生の發足から信仰は始まるのである。言ひ換ふれば禪でいふ「見性」である。「己が十字架を負ふ」とは見性してから後の(新生後)修行である。内外の關係に非ずして、更に一步進みたる後の内的進歩であり内的精進である。無難禪師のいふ「立居につけ我咎をわが心に見せ去ることを怠らずば……ついに去り尽して、我身直に虚空、虚空直ちに我身となる。」内的進歩の徑路である。ポーロのいふ「信仰より信仰に進む」ことである。信仰の第二段以後のことである。”(二四六―七頁)

“こうした道理を分かつた丈ではダメだ。日々実行要す。実行せねば叛逆者となる。日々信心は新しいのが信心。今日一日の信心。十字架を通して神に逢うのが新しい信心。今日只今の新しい信心。三五、九、十七。三七、三、二八。”

一水と童安の反応の違いが興味深いので煩を厭わずに長く引用したが、童安の用いる両忘は時には禪的な飛躍の観念的操作として用いられているが、童安の真意は恐らく次の如くであろう。人間中心の信仰(若い頃の修養やアクセサリーとしての諸宗教の学び)から神中心(福音)信仰へと移つたものの、そこには一水も指摘しているように純粹に神信仰、神仰讃に止り続けることには常に試練がある。静止すれば忽ち觀念化・思弁化するし、神に没入しようとすれば神秘主義化してしまう。そこで童安は日々に十字架を負うという自己の痛みの現実を通してイエスと出会うという道に到達する。十字架を負うことは自己の意志であり自力であるが、天国へ招かれ、神に愛されているのでなければ本質的に十字

架は見えてこないし、負うことも出来ない。

童安はさらに「息」や「足裏在神」といった言葉でこの消息を語っているように思われる。「息」は田原時代以来のことであり、それはキリスト教開眼以後「父子聖靈一如」として屢々語られているところのことであるが、存在し生きているということは呼吸をしていることであり、呼吸は自力と他力（空気）の体験の一致であり、阿吽の呼気と吸気とは意識を超えた生命実感である。「足裏在神」はまた「足裏拝息」、「足裏在神息」、「足裏信息」とかいろいろに表現されているが、足の裏を大切に足うらで神を拝み、足裏で日常一切の行動をしてゆくように心がけてゆくことに目さめさせられし神よりの恵みをありがたく思う。三五、十一、十二。三六、二、一七再認。”（六三頁）

“足のうらで息するのである”（二五頁）

“満足とは足裏で息を呼吸して初めて判る幸福。幸福は足うらにひそむ。人のめにかくれたところに幸福は存在する。さらば足のうらで神息を頂戴せよ。三五、一〇、二七。”（二七頁）

（足は満足・不足の足、また足と息（ソク）とも懸けことばになっていと思うれる。―筆者註）

“神の働らきとは息のことである。黒たる私が白（息）の黒の中での白としての働らきをして頂いているがゆえにこの私は無一物で充分自由自在に生かされて生きてゆく。この一事こそ足のうらで息してゆく処に自得せしめられる。”（一四三頁）

“真の美は足のうらに光っている。隠れたる処、人の目につかぬところに神美が光っている。之を発見する者ハマコトに幸せである。三六、

五、二〇。三七、八、二六。”（二二二頁）

“武蔵野の草にかくれて天地の

恵みに生くる沙弥の童安”（二七六頁）

信仰とは何か、救いとは何か、などはドグマでいろいろに解釈・説明されうるし、実際に教義史を繙けば西欧キリスト教神学二千年の歴史は一眺できる。しかし、信仰によって生きるとはどういうことか、救われているのちの実体とはどういうものか、などということになると、我々は今まで信仰の偉人や先輩の伝記や逸話を讀んだり、証をきいたりする以外にあまり方途がなかったのではなろうか。教会の交わりは信仰の実践や訓練の場であるべきではあっても、現実的にはそれほど機能していないし、継続的な一念の求道という雰囲気にも乏しい。童安は若い日の出発点から日常的現実の中での救いの実体を追求して来た。彼の用語のあいまいさもあって彼の周囲にあった道友たちの中でさえも童安理解は必ずしも一様ではないであろう。しかし、童安が諸宗教の混合した漠然たる宗教的情緒の生活から宗教的実存へと意識的に一つの転回を経験したのはイキの発見とそれに伴う田原修行であったことは明白である。東京世田ヶ谷に移ってから観念的悟りや一般的宗教性から自覚的な宗教的実存の追求が始まった。照峯馨山『転身の一路』との出会いはその象徴的な出来事であった。それはさらに人間中心の信仰から神中心の信仰への飛躍へと続く。その発端は昭和十四、五年頃ではないかと思われる。その信仰的契機には吉川一水との交流が大きな意味をもっていただように思われる。殊に「翁は毎月一回杖を曳きながら私の一如洞へ来られて聖書の話なされた。第一回の発病と第二回の再度の発病とを通

して翁の信仰は大飛躍をされたやうに私には信じられた。この時代は過去の合理的な解釈は棄てられて逆に不合理的解釈即合理的な解釈——とまで飛躍された。例へばこんな風に話された。……」（『書の後に』三〇六頁）。

「蹟くが故に真理だ、真理は総じて不合理である。不合理なるが故に生命である——人間の知性で分るやうな奇蹟なら生命はない」（同三〇六頁）。傍観者に真実はない。真理は理解されるべき概念知識ではなく、現実に生きられるべき生命である。「贖罪と復活のこの二つは説明しない。神と自分との個人的交わりにおいて実現された靈的秘義である。ドグマとされて伝へられるやうな説示される底のものではない事を知った。三五、一〇、四。三七、九、一二」（二八六頁）。しかし童安の歩みは一挙に飛躍するのではなく、昭和十九年の原因不明の腸出血の病いや不安を経て戦後の混乱期、そして最晩年の日々へと向かって徐々に、しかし着実に深められ熟していったと見るべきではなからうかと私は思う。そうした中で童安の信仰の消息を語るものが前述の「父子聖霊一如」や「足裏神息」であろう。

前の拙論でも触れたが（『漂泊と信仰』三三頁）、西川天童師が「その時の話でわすれられない語が二つある。『君、布教というものは、友を得ることだな』……もう一つの語は、『神の方へ頭を向けばケツを娑婆へ向ける、娑婆の方へ頭を向けばケツを神の方へ向ける、どちらか一方をとるべきで、両方とも得ようとすることは出来るものではない。』この語にも全く驚いた」（『童安さんの思い出と遺稿』八七—八九頁）という記事の中の童安の語は、今回『日々の糧』の童安の書込みを調べていて、

それらの語が一水の「伝道の意義」（二〇頁）や「死に対面する時の力」（二九頁）、「生活に就ての鈍感」（三七頁）などにおいて、一水の語や一水の文に応答する童安の語としてあるのを発見して、改めて一水と童安との関係の深さを痛感した。

堀井梁歩について一水は一文を記しているが（七六頁）、本書中明らかに個人名を出しているのはこの一箇所のみである。堀井梁歩は童安とも親しい間柄にあり、彼の死後、英文学者であった堀井の訳稿「ホキットマンの草の葉」を童安は彼の「ホキットマンを語る」を加えて春秋社松柏館から昭和二十一年五月に出版している。

「堀井梁歩は去年（昭和十三年九月十二日）の今日今日此世を去ったのである。……（中略）……彼のやうにウソのなかった人間は世を送るのが嘸ぞ辛かったであろうと思ふ……彼はホツとして世を去り永遠に生きて居る。生きるという事を実際に示し教えてくれたのは彼であった。彼は宝である。」

「梁歩を知ったことを喜ぶ。彼こそロオファアの大將株である。彼のような人間の当今ニ殆どないことを知って寂しく思う。彼ハ又彗星のやうな男でもあった。……」

一水と童安の共通の友人たちもたくさんあって、それらの人々の記録や証言が得られれば両者の関係や童安自身の精神的足跡も、もっと明確に辿ることができるかも知れない。いつしか風霜の年月は容赦なく流れて、その当時の人々も失われて次第に手懸りは消えてゆく。中でも私にとって親しく御指導頂いた福田與様の御急逝は残念至極なことであった。このようなことであればもっとと伺っておけばよかったと悔む

次第である。

最後に一水に関して童安が「この書の外ニ翁の語録として印刷された本が一冊ある（細谷織衣女）編集のもの外ニノオトにとられたもの原稿にかかれたものがある。それらは友人の池田賢三君が保存されている。この外ニ『光りへ』という成瀬女史の発行になる雑誌ニマルコ伝の講話筆記がのせてある。約一カ年つづいたものだ」という書込みを研究者の御参考までに記しておく。

童安の書込みは殆ど全頁にわたってギッシリ記され、本文には赤線などがたくさん引かれている。時間的にもかなり隔りがあり、それらを綿密に分類して整理すべきことであるが、日時の記入のないものも多く、技術的にも私には不可能な作業であった。書込みを通して一水との関係を調べ、童安の精神的足跡を追求するということは予想以上に困難な作業であった。一応まとめは見たものの、重要な点を見落していることも多々あるかと思うが、私としては教えられ考えさせられることの多い研究の日々であった。この貴重な遺品を拝見させて頂き、童安の内面の魂の息吹きと軌跡に接することを許可して下さった秋山マリア様に衷心からの感謝を記してこの稿を終る。

× × ×

(付記)

前回の拙論「宮崎安右衛門覚え書 その三、イミタージュ・クリスチと詩篇」に関して、秋山マリア氏より御連絡を頂き、「イミタージュ・クリスチ」の岩波文庫ですが、「昭和八年十月九日、麻布坂倉にて」の購入書入れの字は父のものではないような気がいたします。大体父は新し

い本を買ったことは無いのではなかったでしょうか。古本を買うのが普通でした。……」という御指摘を頂いた。改めて購入書入れの書体を調べてみると、御指摘のように童安の書体とは異なる、と思われた。右の次第から、購入後（書入れの日時）から最初の通読まで何故数年の期間が空いていたのかという謎が解けた。童安は昭和十三年十二月頃古本を購入して、以後頻繁に本書を繙いたと考えられる。

今一つの御指摘は、「父の常時読んでいた聖書ですが、これもボロボロで、私はほしかったのですが、母の希望でお棺の中に入れました。他にも二冊ばかり立派な聖書がありました。それらには父の読んだあととはなく、皆どこかへ行ってしまいました。父の亡くなる二週間ばかり前の日記に「父の家にはすみか多し」と書かれていたことや、葬儀について細々と指示した日記にはロマ書（たしか三章）を読むように、とあったこと等から、父は神様に自分を明け渡し、安心して希望を持って召されたものと確信しております。……」秋山氏の貴重な御指摘を感謝と共に付記する。

宮崎安右衛門年譜(推定)

明治21年 2月22日生・昭和38年 1月16日歿・享年74才11月

	年代	満才	備 考		年代	満才	備 考
幼 少 年 時 代	明治 21	0	％ 武生に生れる	名古屋 時代	昭和 3	40	父死亡 ％ 上京、北沢一如洞
	22	1			4	41	
	23	2			5	42	3月「草に酔う者」
	24	3			6	43	
	25	4	母死亡		7	44	12月 照峰馨山と識る
	26	5			8	45	10月「貧者道」
	27	6	4月 小学校入学		9	46	
	28	7			10	47	
	29	8			11	48	9月「信仰生活の書」
	30	9	大阪に丁稚奉公に出る(小学校3年中退)(うどん屋であったとか)		12	49	
丁稚奉公時代	31	10		世田谷 一如洞 (一日庵) 時代	13	50	
	32	11			14	51	11月「捨て身の生活」
	33	12			15	52	
	34	13			16	53	10月「善き人々」
上京苦 学時代	35	14	郷里に一時帰り働く 上京、美濃家に勤める		17	54	9月「野聖乞食桃水」
	36	15			18	55	
	37	16	白木屋勤務		19	56	腸出血、贖罪への目覚め
白 木 屋 時 代	38	17			20	57	
	39	18			21	58	
	40	19	受洗(同胞教会)		22	59	8月「無の哲学」、12月「野聖桃水和尚」
	41	20	(春、徴兵検査)		23	60	4月「キリストの福音」
	42	21			24	61	5月「良寛・桃水・草の詩」
	43	22			25	62	
	44	23	新井ハルと同棲		26	63	
	45	24	秋、妻離反		27	64	2月「乞食桃水」、9月「信仰の悲しみ」
宗教ルンペン時代	大正 2	25			28	65	6月「新釈菜根譚」
	3	26			29	66	
	4	27	(6年間の彷徨) 伊豆、伊東を中心に		30	67	
	5	28			31	68	9月「金原明善」、原因不明の発熱 (31年冬から33年1月まで続く)
	6	29			32	69	
	7	30	％ 胃手術、YMCA 勤務 代々木草房、童心房		33	70	％ 発熱の原因を悟る 11月「野聖桃水和尚」
佐々木草房、 童心房時代	8	31			34	71	
	9	32	5月「乞食桃水」		35	72	健康次第に衰える
	10	33	1月「野聖桃水」、2月「聖フランシス」 4月「無身の生活」、5月「聖貧礼讃」 10月「永遠の幼児」		36	73	1月「大馬鹿道」
	11	34	4月「出家と聖貧」、％ 牧野ひさと結婚		37	74	
	12	35	1月「聖心」、5月「聖暗」		38	75	％ 歿、享年74才
	13	36	1月「聖貧への思慕」、11月「神と真理への開眼」、％ 代々木草房閉鎖	死 後 出 版	50		12月「地獄の聖書」 3月「童安童話集」
	14	37			52		
	15	38	4月「永遠の童心」、10月「草の上の学校」		53		1月「童安さんの思い出と遺稿」 11月「大愚の書・信仰の悲しみ」
	田原 修行時代	昭和 2	昭和 2		55		9月「童安さんの日記抄」
		39	％ 童心房閉鎖、田原へ 名古屋一如洞(2年間)		62		7月「宮崎童女遺墨書画集」

イヤラシキ

日々
の
糧

永遠の恩寵

野口書店

この外は「光り」といふ成瀬先生の
発りになる。雅高は、マルクの溝註業社が
のせてある約一カ年づいたものだ。

三十一 年 九月 廿九日 彼岸日

去(る) 水紛はキリストの
 海音にのみ一生涯生きつづけ
 られた信仰の人で主安の
 信仰上の先達でもある救会
 員さす独立信仰をもつた人だ
 私とは約三年以上の交遊をつ
 りれた。今甘穠しい存念なる
 この書の外に公刊の記録として印刷
 された本が一冊ある(細野鐵志
 編集のもの外)。ノオトにもこれ
 などの原稿をかかれたものがある
 ぞとらへばなみの池田賢三君が保存
 されてゐる

二四六 恩寵の支配

[illegible]

日々の秘

二四九 日々の新力

「は日々に新たなり」と言ひしはこの経験である。見えざるもの永遠なるものを見る事はこの力の淵



著者（五〇歳前後）

おのゝとにまゐつてゐる

下

著者紙版

この短冊は公羽の晩年の筆で保存者は
公羽の門下 天長という野村長二郎氏（中野区上高井住）

原稿受理 一九八八年四月十八日